

田中貢太郎訳『聊齋志異』をめぐって

— 「竹青」を中心に —

劉

陽

Tanaka Kotaro's translation of *Liaozhai Zhiyi*
Focusing on the *Zhu Qing*

LIU Yang

Abstract

This paper analyzes the characteristics of *Zhu Qing*, a short story of *Liaozhai Zhiyi* (聊齋志異), translated by Tanaka Kotaro, comparing the original work with Koda Rentaro's annotation and the translation by Shibata Temma. Tanaka was a great admirer of Chinese literature, especially Chinese ghost stories such as *Liaozhai Zhiyi*, and he was to translate 35 of them, published as "The 12th Volume of Chinese Literature".

Tanaka is generally very faithful to the meaning of the original texts as far as possible, make very few unnecessary depictions. In general, he is loyal to the word order, and refrains from expanding the translation. However, the word "Syuusai (one who passed the imperial examination at the county level in the Ming and Qing dynasties)" at the beginning of the translation and *Ryochin* which is written instead of the introduction, showed Tanaka's creativity as a writer. And Tanaka referred to Koda's annotation and the Tenma's translation when translating the unique words and sources in Chinese. However, due to some occasional inconsistencies in Koda's annotation and the Tenma's translation, Tanaka's translation also affected. From these considerations, the characteristics of Tanaka Kotaro's translation becomes clear.

Keywords : 近代日本 中国文学 聊齋志異 翻訳 田中貢太郎

はじめに

中国清朝蒲松齡の有名な怪異小説『聊齋志異』は江戸時代に日本に伝来して以来、多くの文人に親しまれていた。その中に収録されている「竹青」という作品は中国文学研究者柴田天馬と増田渉だけでなく、近代作家である国木田独歩、佐藤春夫及び田中貢太郎も取り上げて翻訳した。

国木田独歩「黒衣仙」(『東洋画報』第1巻第3号、近事画報社、1903年5月、原典は「竹青」)は『聊齋志異』が現代日本語に訳された最初の作品であり、筆者は既にその特徴について考察した¹⁾。本論文では「竹青」が日本語に訳された第二作目である田中貢太郎「竹青」を考察したい。その前にまず田中貢太郎と『聊齋志異』のつながりについて紹介する。

一 田中貢太郎と『聊齋志異』について

田中貢太郎(明治13年(1880)～昭和16年(1941))は小説家、随筆家である。高知県長岡郡三里村仁井田(現・高知市)生れ。桃葉と号した。松次郎、絹の長男。小学校三年を卒えた後、漢学塾に通い、代用教員や新聞記者などをつとめ、23歳で上京したが、病のため一時帰郷し、27歳で再度上京、大町桂月(詩人・評論家)、田岡嶺雲(近代日本の文芸評論・思想家)の影響を受けた。彼が実録もの、情話ものの書き手として注目を浴びるようになるのは、大正3年(1914)12月に「中央公論」に発表した『田岡嶺雲・幸徳秋水・奥宮健之追懐録』からである。

その後、滝田樗陰(当時中央公論の編集長)の知遇を得て、同誌の「説苑欄」に『選挙干渉物語』『街頭騒擾録』『明治大正瀆職及不正事件史』『支那歴朝帝位篡奪史』などを次々と発表した。この欄は作家ではあるが小説家ではない書き手を積極的に起用しており、田中貢太郎はその代表的な書き手として活躍し、情話から怪異譚、さらには伝記性に富んだ小説へと仕事の領域を広げた。

田中の代表作と言え、怪異ものとして『怪談全集』(改造社、1928年)、『奇談全集』(改造社、1929年)、『支那怪談全集』(博文館、1931年)、『新怪談集』(改造社、1938年)などがある。小説では『旋風時代』(1928年～1929年)、『朱唇』(週刊朝日、1932年2月1日～5月29日)などがある。そして、史伝には『志士伝奇』(改造社、1935年6月)、『孔子と其の生涯』(東海出版社、1941年)などが刊行されている。また俳句も桂月に学び、句集に『田中貢太郎俳句集』がある。没後、生前の業績に対して菊池寛賞が与えられた。彼の文体の特徴について、「漢文脈にたつ用語法を駆使しながらも、どこかに俳味を感じさせるところがあり、あたたかくまた寛

1) この内容に関して2019年10月5日に韓国外国語大学で行われた第3回欧米アジア博士フォーラムで「近代日本における『聊齋志異』の翻訳について―国木田独歩を中心に」の口頭発表をした。

容さに富むものであった』²⁾と評価されている。

一方、田中も漢籍を好んでおり、特に『剪燈新話』や『聊齋志異』など中国の怪談を愛読した。彼が執筆した『貢太郎見聞録』³⁾に「支那漫遊前記」という1篇があり、以下の記述が見られる（下線は筆者、以下同じ）。

最初私が支那というものを頭に入れたのは、馬琴蘭山訳の水滸伝であろう。それから文章軌範では赤壁を知り、岳陽樓から見る洞庭湖の澎湃たる水を知り、史記左伝では帝王の都城を知り、人の巧智を知り、黄河楊子江の流れの大なることを知り、唐詩選三体詩では、山川沼湖、野坡池塘の景趣を知り、詩人の風懐を知ったが、その少年の時の印象は、日清日露（1891-1910）の戦役を経るに及んで、満州の印象のために消滅されてしまった。其所には文明もなく、歴史もなく、野外を彩る花片もなく、あるものは、一望際涯のない高粱畑で、その間に点在した都市には、煙のような沙塵が無い、情感のない土人が行き、馬が嘶き、犬が尻に集まり、豚の群が下水のどろどろした陰地に寝そべり、蠅が食物の上に真黒に止まって、それがやがて水滸伝の殺伐な人物につながっていたが、この十年来、支那の小説随筆を新しい眼で見ようになって、わけて伝奇的な物語を好んで読むようになってから、奇艶瑰麗な支那が絵のようになって私の前に露われて来て、忘れていた軽の大臣の物語なども生って来た。軽の大臣は遣唐使として唐へ往って、人のために毒物を飲まれて唾にせられ、頭に灯械を打たれて、灯台鬼となっていたが、日本から尋ねて来た我が子の弼の宰相を見て、指を噛み切り詩を題して、父であることを知らずという伝説である。安倍仲磨の海上の遭難を悼んだ、李白の日本晁卿帝都を辞すの詩も思いだすようになった。そして支那の伝奇的な作物に筆をつけるようになってから、人に聞いても書物で読んでも薄紙を隔ているようではっきり判らない、支那人の生活様式も知りたくなくて、南支那に遊ぶことになったが、まず上海に往くことにした。

ここに登場する『水滸伝』、『文章軌範』、『岳陽樓』、『史記』、『左伝』、『唐詩選』、『三体詩』はいずれも中国の優れた作品であり、田中貢太郎は漢籍を広く読みあさったことの一部が示されている。また、下線部によって、日露戦争を経て彼の中国に対するイメージが変わり、中国の怪異譚を愛読、さらに創作しようとするようになった経緯が分かった。

そして、同じく「支那漫遊前記」に属している内容から『聊齋志異』の影も見られる。

私は長江を遡って重慶へ往っての帰りに、洞庭湖の水を見たいと思っている。

洞庭湖にはいろいろ伝説がある。柳毅と云う書生は龍王の女を助けたために、富貴とそ

2) 尾崎秀樹「田中貢太郎」、小田切進編『日本近代文学大事典第二巻』（講談社、1977年）を参照。

3) 大阪毎日新聞社、1926年。

の女とを得たが、後には洞庭の神となった。

汪士秀と云う蹴鞠に妙を得ている男は、悪魔のために水にかくされている父を救うて、魚妖を斬った。

柳生と云う書生は、舟の上に酔い臥していて、舟に来て遊んでいる水神の侍女の鞭を噛んだが、それが縁となってとうとうその侍女と結婚し、毎年二回、洞庭湖の水神の許へ挨拶に往ってそのつど金帛珍物を貰って来て富豪になった。

引用部における1番目の伝説は柳毅伝説であり、長い歴史がある中国の神話伝説である。その内容を文学の形で表したのは唐代の李朝威が書いた『柳毅伝』である。2番目は『聊齋志異』における「汪士秀」であり、3番目は『聊齋志異』における「織成」である。田中貢太郎にとって、『聊齋志異』を含む中国の怪談は非常に印象深いものであったことが窺える。

二 田中貢太郎訳『聊齋志異』—『支那文学大観第十二巻』

田中貢太郎訳『聊齋志異』は『支那文学大観』（支那文学大観刊行会、1926.3-1927.4）の一冊として刊行された。『支那文学大観』は刊行当初全14巻と予定されていたが、第1、7、9、13、14の5冊は刊行されなかった。刊行されたのは2・3『還魂記』、4『風箏誤』、5・6『桃花扇』、8『唐代小説』、10『剪灯新話』、11『今古奇観』、12『聊齋志異』である。第12巻（大正15年4月3日）、第5巻（大正15年5月25日）、第10巻（大正15年7月15日）、第11巻（大正15年7月29日）、第8巻（大正15年11月2日）、第4巻（大正15年11月27日）、第2・6巻（2冊とも大正15年12月20日）、第3巻（昭和2年4月20日）の順に発行された⁴⁾。

つまり田中貢太郎訳『聊齋志異』は『支那文学大観』シリーズの最初である。この本は以下3つの部分から構成されている

聊齋志異開題	(公田連太郎執筆)
涼亭一序に代へて一	(田中貢太郎執筆)
聊齋志異	(田中貢太郎訳35篇 + 公田連太郎注付き原文)

漢文学者である公田連太郎は「聊齋志異開題」において、この『聊齋志異』に注解を付けるきっかけに関して、以下のように述べている。

因に記す、回顧すれば今を去ること十六年前即ち明治四十三年の事であったが、故岡嶺

4) 「レファレンス協同データベース」を参照。リンクは以下の通りである。

https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000185714

雲君が垂死の病軀を以て漢籍国訳注解の事に努力して居られた時、ある秋の日、私が同君を訪問したとき、『いつか聊齋志異のおもしろい話を選んで国訳注釈しようではないか』と曰われ、私は『出来るだけ手伝をしよう』と答えたことがある。其の時実は私はまだ聊齋志異を読んだことは無かったのである。其の後二年即ち明治四十五年、同君は不帰の客となってしまう、終に本書の国訳注解の事を果たすに至らなかったのである。（中略）其の後また数年、大正十一年夏、私が府下南葛飾郡小岩村に寓居していた時、田中君が吉岡文次郎君と与に来訪せられ、一処に江戸川堤をぶらぶら歩きながら、種々雑多な話を交えたうちに、本書の事を話されたことがある。其の後始めて私は本書を通読しようと志し、其の年九月二十三日に一読し了ったのである。昨大正十四年、支那文学大観刊行の計画あるや、私が喜んで聊齋志異の原文の注解を引き受けることになったのは、上に述べた事情があった為である。実を言えば私は多少支那の書物を読まぬではないが、どちらかと云えば小むずかしい理窟ばった方面のものを読もうとしているので、純文学方面には全くの門外漢である。其の門外漢たる私が、図らず支那文学大観刊行会から依頼を受けるに従って、僭越にも喜んで本書の注解を担当することを敢てしたのは、全く上述の事情の為である。田岡君が不帰の客となって以来、本書の注解をしようなどとは夢にも思っていなかったのに、それから十数年の後に、思いも寄らぬ所から思いも寄らぬ依頼を受けて、遂に本書の注解をすることになったのは、何か不思議な因縁でもありそうにも思われぬではない。殊に喜ばしく思うのは、訳文の担当者が田岡君と親しかった田中君である事である。田中君と始めて相識ったのも、明治四十三年夏、田岡君の西大久保の僑居に於てであった。

このように、主に『史記』⁵⁾や『全訳莊子』⁶⁾など歴史、思想関係の漢文の注解をしていた公田が怪異小説である『聊齋志異』の注解を引き受けるのは友人田岡嶺雲の遺志につながっていることが分かる。

ただし公田自身の『聊齋志異』への好みも無視できない。氏は当時の中国において「最も広く読まれて最も愛して読まれるものは何であるかと言えば、蓋し此の聊齋志異に勝るものはあるまい」と言い、その理由を以下のようにまとめる。

この書は全十六巻あり、凡そ四百四十六篇の話が載録せられてあるが、描写の繁簡精粗、宜しきを得、自然の神韻、人を魅する物があるのみならず、其の載する所の妖怪には、暖なるゆかしき人情味を備えたる、親しむべき愛すべきものが多いのである。怖るべき悪むべき、人に危害を加うる、所謂鬼気人を襲うというような物凄い妖怪も全然無いでは無い

5) 公田連太郎が訳注したものは『国訳漢文大成』経子史部（国民文庫刊行会、1935年）の第13巻（「国訳史記本紀」・「国訳史記表」）と第14巻（「国訳史記書」・「国訳史記世家」）として刊行された。

6) アトリエ社、1937年。

が、比較的頗る少いのである。これは此の書が最も広く読まれる所以の重要なものではあるまいか。

その上で、『聊齋志異』の400篇余り⁷⁾の中から35篇を選んだのは、「成るべく種類の異なったものを選ぶ方針で、殆どすべて訳者田中君が選ばれたものである」と述べている。

一方、『聊齋志異』の話を蒲松齡がどのように集めていたかについて、彼はお茶やたばこなどを用意して大通りに座って、通る人を呼びかけて奇異な話を聞いて、それをもとに創作したという説がある。田中はこのエピソードに基づいて序言の代わりに「涼亭」を書いた。「涼亭」は脚本形式であり、登場人物は以下のように設定されている。

蒲留仙 五十前後の瘦せてむさくるしい容^{なり}をしている詩人、胡麻塩の長いまばらな顎髯を生やしている。

李希梅 留仙の門下、二十五六の貴公子然たる読書生。

葉生 浮浪人、二十六七の背のひよろ長い髪の赤茶けた碧い眼の青年。

村の人

旅人 甲、乙。

留仙は蒲松齡の字である。田中は「山東省淄川の某山村の街路」にある涼亭において、蒲留仙が珍しい話を集める日常を描いている。この『聊齋志異』の一冊は翻訳集であることが前提なので、より正しい訳を求め、原本に忠実に訳していると想定できる。とすれば、翻訳を行った際に控えていた作家としての創作力はこの「涼亭」によって発揮できたと見えよう。

三 田中訳「竹青」と原典「竹青」との比較

次に中国語原文と比較しながら田中貢太郎訳「竹青」を考察していきたい。田中が当時手元にある原本として流布本の源である青柯亭刻本⁸⁾と公田連太郎注原文があり、その中に収録されている「竹青」の中国語原文を比べてみれば、漢字や区切り、注釈を付ける箇所などの違いが見られるが、内容の理解に影響を及ぼす違いは見つからない。本論では原本と比較する際に2つの版本ともに引用するが、異同がない際は公田連太郎注原文のみ取り上げる。

7) 公田連太郎は446篇と述べているが、版本の違いによって491或いは494篇という説もある。千田九一「翻訳文学としての『聊齋志異』」(『国文学解釈と鑑賞』18(9)、1953年9月)を参照。

8) 乾隆31年(1766)、趙起杲が鮑以文ら五名の協力を得て刊行したもので、現存している刻本中、最も早期のものである。収載するところ445篇。本刻本は16巻だてで、はばかって文字を変えたり、改竄や削除を施したり、理由のわからない文字の変更や、脱漏、誤記などがある。従来はこれをもとにして刊行されてきたので、本書が流布本の源であるが、現在では『青柯亭刻本』といっても、数種の異本が生じている。

先行研究として押野武志「『竹青』と田中貢太郎訳、公田連太郎註『聊齋志異』」（『太宰治研究』(23)、2015年、和泉書院）及び江明瑾「問われた〈言葉〉—太宰治「竹青」論」（『日本文芸論叢』(19)、2010年3月）が挙げられる。発表媒体またタイトルから見られるように、この2本の論文はいずれも近代作家太宰治が『聊齋志異』「竹青」から取材した同名翻案作品『竹青』をめぐるものであり、原本「竹青」の文体の特徴について言及した。

江明瑾⁹⁾は『聊齋志異』の中国語原文が「文言的・簡潔な表現を使用し、動作と発話の主語も省略されるため、物語のリズムが速くなり、不思議なことが次々と出てくる印象を与えるが、理解しにくい部分もある」と指摘した。それに対して、田中貢太郎が訳する『聊齋志異』「竹青」は中国地名の解釈や作中人物の心情の説明など、語り手の役割を増幅し、登場人物の〈言葉〉を直接に示す表現法を使用して、原文の理解しにくい部分を補足すると述べている。

押野氏は田中執筆の「涼亭—序に代へて—」に注目し、田中が描いた蒲松齡像と『聊齋志異』の自序である「聊齋自誌」に見られる「孤憤」の人としての蒲松齡との間に少なからぬ差異があると指摘した。

既に述べたように、江氏と押野氏の論文は太宰治の翻案作品を中心としたものなので、田中訳「竹青」に対する分析は不十分であると考えられる。ここでは先行研究を踏まえながら、田中訳の特徴をより詳しく考察する。

田中訳と公田注付き本文の引用は『支那文学大観』（支那文学大観刊行会、1926年）所収の本文に拠った。また時間的にみれば、田中が国木田独歩訳と柴田天馬訳を参照した可能性があるため、この2つの訳を比較対象として取り上げる場合がある。本文の引用はそれぞれ、国木田独歩「黒衣仙」（『東洋画報』第1巻第3号、近事画報社、1903年5月、以下独歩訳）、と柴田天馬訳「竹青」（『和訳聊齋志異』、玄文社、1919年、以下天馬訳）による。引用の際、旧字体を適宜新字体に改めた。

1. 拡大訳について

『聊齋志異』における「竹青」のあらすじは以下の通りである。

湖南の魚容が科挙試験に落第し故郷に帰る途中、しばらく呉王廟の中に休憩する。呉王の神体の前に連れて行かれて、使者に採用され鳥になった。彼は竹青という雌の鳥と結婚し、楽しく日を送って間もなく、銃弾に当たり人間の姿で人間界に生き返る。その後、魚が科挙試験に及第して、竹青を恋しく思ったので、故郷に帰る途中、また呉王廟に参詣する。その夜、既に人間の姿に化した竹青が現われ、自分が漢江の神女となったと伝えた。竹青は神界から離れたくないために、魚は黒衣を被って人間界と神界の間を往来して暮ら

9) 「問われた〈言葉〉—太宰治「竹青」論」、『日本文芸論叢』(19)、2010年3月。

した。その間、竹青は男の子二人、女の子一人を生み、長男の漢産を魚生の間界の妻、和氏に譲った。和氏が死んだ後、魚は長男の漢産を人間界に残し、次男の漢生と娘の玉佩を連れて家を出るが、それから帰らなかった。

原作の『聊齋志異』は文言小説であり、簡潔で洗練された文体で書かれたものであるため、日本語に翻訳する際に必要な部分を補償することは避けられない。田中訳「竹青」の原作と一番大きな違いは、公田連太郎が注釈した洞庭湖の紹介をほとんどそのままを入れたことである。「呉王廟」という言葉が初めて出たところを見てみよう。

青柯亭刻本「竹青」

餓甚。暫憩吳王廟 宋牧仲筠廊偶筆楚江富池鎮有吳王廟祀甘將軍寧也宋時以神風助漕運封為王靈顯異常舟過廟前必報祀有鴉數百飛集廟傍林木往來迎舟舞噪帆檣上下舟人恒投肉空中餵之百無一墜其送舟亦然云是吳王神鴉 又許鶴沙滇行紀程自九江北一十里過富池入楚境二十里過田家鎮有吳甘興霸廟順治年間有史官莊回生典試楚省夜泊廟前夢甘將軍來拜莊索莊一僕一馬皆所愛者夢中不得已諾之詰朝僕馬俱斃地有神鴉往來江上帆檣過此不拘餅餌粒食撒空飼之羣鴉飛舞接食百無一墜食畢間有集舟檣之杪送出廟境俗謂將軍遣使送客其聲啞啞類慈烏上下三十里皆有之亦一奇也 按甘寧字興霸巴郡人少有氣力好遊俠仕吳為孫權將開爽善計略尤輕財敬士嘗從周瑜拒曹操於烏林攻曹仁於南郡屢立戰功時稱為江表虎臣 中。

拙訳（本文）：極めてお腹が空き、しばらく呉王廟の中で休憩する。

青柯亭刻本『聊齋志異』は、趙起杲が鮑以文ら五名の協力を得て刊行したものであり、呉王廟について極めて詳細な注釈が付けられている。長文で句読点は付されていない。本論では『全校會註集評聊齋志異全4冊』（蒲松齡著、任篤行校正、人民文学出版、2015年）から句読点付きのものを引用して参考した。

宋牧仲《筠廊偶筆》：「楚江富池鎮有吳王廟，祀甘將軍寧也。宋時以神風助漕運，封為王，靈顯異常。舟過廟前必報祀。有鴉數百，飛集廟傍林木，往來迎舟數里，舞噪帆檣上下。舟人恒投肉空中餵之，百不一墜。其送舟亦然。云是吳王神鴉。」○又許鶴沙《滇行紀程》：「自九江北一十里，過富池入楚境；二十里，過田家鎮，有吳甘興霸廟。順治年間，有史官莊回生典試楚省，夜泊廟前，夢甘將軍來拜訪（筆者注：青柯亭刻本は「拜莊」），索莊一僕、一馬，皆所愛者。夢中不得已諾之。詰朝，僕馬俱斃。地神鴉（筆者注：青柯亭刻本は「地有神鴉」），往來江上，帆檣過此，不拘餅餌粒食，撒（筆者注：青柯亭刻本は「撒」）空飼之，羣鴉飛舞接食，百無一墜。食畢，間有集舟檣之杪，送出廟境。俗謂將軍遣使送客。其聲啞啞，類慈烏，上下三十里皆有之。亦一奇也。」○按：甘寧字興霸，巴郡人，少有氣力，好遊俠。仕吳，為孫權將。開爽，善計略，尤輕財敬士。嘗從周瑜拒曹操於烏林，攻曹仁於南郡，

屢立戦功，時稱爲江表虎臣。

二重下線部のように、清朝の詩人でもあり、政治家でもあった宋牧仲の『筠廊偶筆』、清朝の文人許鶴沙の『滇行紀程』、編集者（趙起杲を含む6人内の誰か）の3つの解釈が提示されている。

一方公田連太郎注付き原文には返り点が付いており、呉王廟のところに注釈が付けられている。その注釈はほぼ前記宋牧仲の『筠廊偶筆』による中国語の直訳である。公田の注は田中によってほぼそのまま本文に取り入れられた。

公田連太郎注付き「竹青」

餓甚。暫憩呉王廟^(三)中。

注（三）呉王廟。楚江の富池鎮に呉王廟有り、三国の呉の將軍甘寧を祀る。宋の時、神風、漕運を助くるを以て封じて王を為す。靈顯異常なり。舟、廟前を過ぐれば必ず報祀す。鴉数百有り、飛んで廟傍の林木に集まり、往来して舟を迎ふること数里、舞うて帆檣の上に噪ぐ。舟人、肉を空中に投じてこれを餒ふ。群鴉之を接け、百に一をも墜さず。舟人、これを呉王の神鴉と云ふ。

拙訳（本文）：極めてお腹が空き、しばらく呉王廟の中で休憩する。

田中貢太郎「竹青」

ひもじくなって歩かれないようになったので、暫く休むつもりで呉王廟の中へ入って往った。そこは洞庭のうちになった楚江の富池鎮であった。呉王廟は三国時代の呉の甘寧將軍を祀ったもので、水路を守る神とせられていた。廟の傍の林には数百の鴉が棲んでいて、その前を往来する舟を数里の先まで迎えに往って、舟の上に群がり飛ぶので、舟から肉を投げあげてやるといち啄でうけて、下に墜すようなことはなかった。舟の人はそれを呉王の神鴉と云っていた。

下線部はもともと原作になく、田中が付け加えた内容である。「呉王廟」は中国の固有名詞であり、隠された文化背景が分からない日本人読者にとって馴染まない言葉であろう。田中訳『聊齋志異』の翻訳集は『支那文学大観』シリーズの一冊として想定読者層は知識人ではあったが、必ずしも「呉王廟」の歴史に詳しいとは限らず、解釈を付けなければ、その後の舟人が鳥に肉を投げる場面も理解されない可能性があると考えられる。だが、もし公田のように注釈を付けたら、読者の目線は本文から一端離れなければならないので、集中させるように直接本文に入れたのではないだろうか。これは物語の流れをスムーズにするための工夫と言えるだろう。

ただしこの箇所以外、田中は原作に忠実であることを求め、拡大訳を控えていると考えられる。以下3組の引用を取り上げ、それぞれどのように訳されているのかを考察する。文ごとに分けて見てみたい。

(1) 魚容が銃弾に当たる場面

表 1

公田連太郎 注付き「竹青」	田中貢太郎「竹青」	拙訳
魚毎取食。	魚は舟の上へ往って食物をあさる時に、	魚は毎回食物を漁る時に、
輒馴無機。	馴れてしまって用心しないので、	いつも警戒心を持たなくたり機敏でない。
竹青恒勸諫之。	竹青はよく説き勧めるが	竹青はよく説き勧める。
卒不能聽。	結局聞かなかった。	結局聞かなかった。
一日有兵過。	ある日、兵士の乗った舟が通った。	ある日兵士が通った。
彈之中胸。	兵士は肉のかわりに銃弾を飛ばした。銃弾は魚の胸にあたった。	兵士は銃弾を飛ばした。
幸竹青銜去之。	魚が落ちようとする竹青が銜えて往ったので、	幸いなことに竹青が銜えて行った。
得不被擒。	兵士につかまらずにすんだ。	捕まらずにすんだ。
羣鳥怒。	鴉の群は朋輩を撃たれて怒り、	鳥の群れは怒った。
鼓翼搨波。	羽ばたきをして波をあふったので、	羽ばたきをして波を巻き起こした。
波涌起。	大きな波が湧き起って	波が湧き起こった。
舟盡覆。	兵士を乗せた舟は覆ってしまった。	舟はすべて覆ってしまった。
竹青乃攝餌哺魚。	竹青は魚を林の中へ伴れて往って、餌をあさって来て食わそうとしたが、	竹青は餌を漁って魚に食べさせた。
魚傷甚。	魚は傷がひどかったので	魚は傷がひどかった。
終日而斃。	その日の中に死んでしまった。	その日の夜に死んでしまった。

下線部は田中が付け加えた内容であるが、詳しく見るとほとんどディテールの補足であることが分かった。例外は1箇所があり、「兵士につかまらずにすんだ」における「兵士に」は中国語原文で省略された目的語の補足である。

田中は魚が銃弾にあった経緯を再現するために、少し拡大訳を施したものの、原作に沿った忠実な翻訳であると考えられ、語順もまったく変えなかった。

(2) 魚容が人間界の洞庭湖に戻って舟人にお礼をあげる場面

表 2

公田連太郎 注付き「竹青」	田中貢太郎「竹青」	拙訳
枕邊一襖。	枕もとには一つの包みがあった。	枕元に一つのふろつき包みがあった。
檢視。	開けてみると	開けてみると
則女贈新衣襪履。	女のくれた新しい衣服、履、襪など入っていた。	女のくれた新しい衣装、履、襪が入っていた。
黑衣亦摺置其中。	黒い衣服もその中に入れてあった。	黒い衣装もその中に入れてあった。
又有綉囊。	また繡をした袋	また刺繡を入れた袋
維繫腰際。	を腰のあたりに結えてあったが、	を腰のあたりに結びつけてあった。
探之。	—	手を入れて触ると
則金貲充物焉。	それには金がいっぱい充ちていた。	お金がいっぱい入っていた。
於是南發。	そこで南に向って舟をやり、	そこで南に向かって出発し、
達岸。	前岸に着いて、	向こう河岸に着いて、
厚酬舟人而去。	船頭にたくさんの礼をやって帰った。	舟人にたくさんお礼をして帰った。

(3) 結末部分

表 3

公田連太郎 注付き「竹青」	田中貢太郎「竹青」	拙訳
漢産十二歳。	漢産は十二で	漢産は十二の歳に
入郡庠。	郡の学校へ入った。	郡の学校に入った。
女以人間無美質。	竹青は人間には美しい質の女がないからと云って、	女は人間には美しい質の女がないからと言って、
招去。	漢産を呼んで	(漢産を)呼んで
爲之娶婦。	妻を迎えさし、	妻を娶せ、
始遣歸。	そして帰してよこした。	そして帰らせた。
婦名扈娘。	漢産の妻になった女の名は扈娘と云って、	妻の名前は扈娘であり、
亦神女産也。	これも神女の産れであった。	(彼女)も神女の産まれであった。
後和氏卒。	後、和が死んだ。	後和氏が死んだ。
漢生及妹皆來躡躡。	漢生及び妹の玉佩も皆喪の礼を行った。	漢生及び妹の玉佩も皆喪の礼を行った。
葬畢。	葬儀が畢って	葬儀が終わって
漢産遂留。	漢産は留り、	漢産は残り、
生携攜漢生玉珮去。	魚は漢生と玉佩を伴れて出て往ったが、	魚は漢生と玉佩を連れて離れた。
自此不返。	それから返らなかった。	それから帰らなかった。

(2)の段落では、「探之」、つまり刺繍を入れた袋に「手を入れて触る」という動作の省略以外、原文の語順及び内容と完全に一致している。(3)では、原作との違いとして2箇所が見られる。まず「女以人間無美質」(女は人間には美しい質の女がないからと言った)という文の主語は「女」から「竹青」に変更された。原作における「女」は明らかに神女竹青のことを言っているのだから、直接「竹青」の名前を示したほうがよりわかりやすいだろう。また、中国語原文では、「招去」(…を呼ぶ)という文の目的語に当たる対象——長男の漢産は省略されたが、田中はそれを付け加えた。これもわかりやすさのためであろう。

このように、(1)と比べ、(2)と(3)はより分かりやすく田中訳の忠実さを反映している。それぞれの文は原作と対応しており、余計な描写や修飾がなく、必要な内容のみを残していることが窺える。田中は作家であるにも関わらず、あまりに創作力を注ぐわけではなく、わかりやすさと翻訳の正しさを求めていることが見受けられた。

2. 作家としての「創作」

前に述べたように、田中は忠実さを求めており、拡大訳を控えているが、その作家としての創作力が現れる箇所が1箇所のみ見受けられる。冒頭の部分を再掲する。

公田連太郎注付き「竹青」(本文)

魚容湖南人，談者忘其郡邑。家綦貧。下第歸，資斧斷絶。

拙訳：

魚容は湖南の人であり、語り手は彼の（出身地の）郡や県を忘れた。家が極めて貧乏である。（科挙試験に）落第して帰っている途中で旅費が付きってしまった。

柴田天馬「竹青」

ぎょよう こなん ひと はな もの ぐん むら わす い たいそ まず ぶんかん
魚容は湖南の人で（とのみで談した者は郡や邑を忘れて居た）家が綦う貧しかった。文官
しけん らくだい かん く とちゆう みやう つき
試験に落第し帰って来る途中で資斧が断絶たけれど（後略）

田中貢太郎「竹青」

魚容と云う秀才があった。湖南の人であったが、この話をした者が忘れていたから郡や村の名は解らない。ただ家が極めて貧乏で、文官試験に落第して帰っている途中で旅費が尽きてしまった。

引用部分を比べてみれば、田中はほぼありのままに翻訳しており、原作の内容を一々再現し、余計な描写がほとんど見られない。例外は二重傍線部の「秀才」という言葉である。原作では魚容の出身地のみ紹介されるが、田中は「魚容と云う秀才があった」という記述を付け加えた。天馬訳からも見られないので、これが田中独自の考えであろう。

『聊斎志異』が創作された中国の清代に地方学校の代表的なものとして府学、州学、県学があり、府州県学の在學生を生員と言い、「秀才」とも雅称される¹⁰⁾。一方日本語で、「秀才」は学識・才芸などの優れた人を指している¹¹⁾。田中は中国文化について十分な知識を持っているので、ここでは中国語における意味で使っていると考えられるが、魚容が知識人であることを示す面では、日本語における意味で捉えられても問題ない。本来、翻訳する際に「秀才」という言葉は必要がないが、あらかじめ読者に主人公の人物像を提示するのは田中の作家としての発想からのではないだろうか。

3. 中国語における固有の言葉、典拠などの訳し方について

「竹青」には、日本人読者に馴染まない固有の言葉がいくつ含まれている。まず冒頭部を見よう。

公田連太郎注付き「竹青」

魚容湖南人、談者忘其郡邑。家綦^(一)貧。下第歸、資斧^(二)斷絶。

注（一）綦は極めて也。

10) 科挙制度については『宮崎市定全集15 科挙』（岩波書店、2000年）を参照。

11) 『日本国語大辞典』第二版第六卷（小学館、2004年）を参照。

（二）資斧は旅行の費用。

拙訳（本文）：

魚容は湖南の人であり、語り手は彼の（出身地の）郡や県を忘れた。家が極めて貧乏である。（科挙試験に）落第して帰っている途中で旅費が付きってしまった。

田中貢太郎「竹青」

魚容と云う秀才があった。湖南の人であったが、この話をした者が忘れていたから郡や村の名は解らない。ただ家が極めて貧乏で、文官試験に落第して帰っている途中で旅費が尽きてしまった。

引用の部分に「湖南」、「郡邑」、「下第」、「資斧」という4つの単語が見られる。そのうち、中国の地名である湖南は原作のまま用いられ、資斧は「旅行の費用」という公田の注に従って旅費に訳されている。残った「郡邑」と「下第」の訳し方を検討する前に、田中訳と柴田天馬訳のつながりに注目したい。

柴田天馬（本名柴田一郎、1872-1963、以下天馬）は、現鹿児島市生まれの中国文学研究者及び翻訳者で、『聊齋志異』の世界初の全訳をしており、その個性的な翻訳で知られている。天馬は自身の翻訳文体を「正訳」と呼び、「正訳というと何か改まった感じがしますが、要は原文を殆ど増減せず、振仮名の効果を極度に利用し、できるだけ漢音を避け、直訳と意識を兼ねた平易な文章にしたものであります」¹²⁾と述べている。

郡司祐弥は「柴田天馬『聊齋志異』翻訳文体としての「正訳」の変遷とその特徴」（『言語社会：Gensha』13、2019年3月）において、天馬の正訳の特徴を以下のようにまとめている。

- ① 原文の漢字をそのまま用いて原文に忠実に文字数を増減しないように心がける。
- ② 漢音（※音読みのこと）を避けて通俗平易な和訓の振仮名（と送り仮名）を当てる。
- ③ 原文の直訳と和訓の意識を同時に成立させる。
- ④ 総振仮名である。

また郡司氏は田中訳の特徴についても言及しており、田中訳の多くは天馬訳を下地にしていると述べた上で、田中訳には同時に公田連太郎の訓点付き原文が収録されており、かつ振仮名が振られた語もあるが、原文漢字はもとより助字などを残すという理念に立脚しているわけではないと、二人の訳し方の違いを指摘した。

郡司氏によって、田中の翻訳理念は天馬と異なるが、当時天馬訳を参照したことが分かった。

12) 柴田天馬訳『聊齋志異』第1巻「嫦娥之巻」、創元社、1951年。

前記引用部における「郡邑」及び「下第」の訳し方もその根拠として挙げられる。天馬訳と対照しながら見ておきたい。

表 4

田中訳	天馬訳
魚容と云う秀才があった。	ぎょよう 魚容は
湖南の人であったが、	こなん ひと 湖南の人で
この話をした者が忘れていたから <u>郡や村</u> の名は解らない。	(とのみで談した者は <u>郡や邑</u> を忘れて居た)
ただ家が極めて貧乏で、	たいてい、まず 家が暮う貧しかった。
文官試験に落第して帰っている途中で <u>旅費</u> が尽きてしまった。	ぶんかんしけん らくだい かえり くる 途中で 資斧が断絶たけれど (後略)

「郡邑」は中国古代の行政区画であり、府と県のことを指す。天馬は正訳の理念に基づき、漢字をそのまま用いており、「郡」と「邑」にそれぞれ「ぐん」と「むら」という振り仮名を付けている。ただし、原作における府、県は日本における府、県と一致していない。

『聊斎志異』が書かれた清朝は、主な行政区画は省—府—県及び省—直隸州—県、という3層の行政区画から成り、村は県の下に置かれた行政区画の中で最小の単位である。また郡は秦朝から第1層、第2層の行政区画として設置され、唐代から使われなくなり、明清に府の雅称となった¹³⁾。それに対して、田中が「竹青」を訳した当時の日本は府県制であり、郡は府県と町村の中間の地方公共団体として設置されていた¹⁴⁾。つまり、中国における「郡(府)」は第2層の行政区画であり、日本における郡に近い。中国における「邑(県)」は第3層の行政区画であり、日本における町村に近い¹⁵⁾。

また『角川新字源改訂新版』¹⁶⁾によると、名詞としての「邑」は人の居住する場所、「くに」、「みやこ」、「むら」の意を表すために、「国」、「都」、「村」という3つの漢字に置き換えることが可能である。天馬が「村」の読み方「むら」を選んだのは原作に忠実な訳であると言える。田中が「郡邑」を「郡や村」に訳したのは天馬訳の影響を受けたと考えられる。

次に「下第」の訳し方を見てみたい。下第は科挙試験に不合格であったことを指す。科挙試験は中国において、隋代より清末まで、1300年以上の間に実施されてきた、高等官資格試験制

13) 周振鶴『中国歴代行政区画の変遷(中国历代行政区划的变迁)(中国国際広播出版社、2010年)を参照。

14) 総務省「地方自治制度の歴史」、

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/history.htmlを参照。

15) 財団法人自治体国際化協会(編)『中国の地方行財政制度』(PDF版、2007年)を参照。

16) 小川環樹[ほか]編、Kadokawa、2017年。

度である¹⁷⁾。天馬は科挙試験を「文官試験」に訳し、田中もそれを受け継いだと言えよう。

一方、現時点で調べたところ、田中が翻訳した際の参考対象となり得るのは天馬訳以外、1903年に発表された独歩訳も挙げられるため、独歩訳の冒頭部も取り上げる。

国木田独歩『黒衣仙』冒頭部

昔は支那の国、湖南という所に魚生という青年が居た。
官吏になる試験を受けるため都に出向たところ不幸に落第した。

引用部のように独歩は魚容の出身地を紹介する際に、湖南(省)のみを提示しており、その下の行政区画を言及していないことが見られる。また科挙試験を「官吏になる試験」に訳した。そこで、「郡邑」、「下第」という2つの言葉の訳し方に関して、田中が参考した可能性があるのは独歩訳ではなく、天馬訳であると言えよう。

このような言葉は他にもある。例えば魚容が官吏になって再び呉王廟を参拝する場面に、「領薦」と「少牢」という2つの語が見られる。

公田連太郎注付き「竹青」¹⁸⁾

後領薦 ^(一) 歸。復謁吳王廟。薦以少牢 ^(二) 已。乃大設。以饗烏友。

注 (一) 領薦は推薦せられた仕官する也。
 (二) 少牢。祭祀燕享に羊を少牢と謂う。

拙訳(本文)：

後郷試に合格して帰った。また呉王廟に参拝して、羊と豚を供えた。たくさんの食べ物を設けて、烏の友達に御馳走をした。

田中貢太郎「竹青」

魚は後に官吏になって帰って来たが、復た呉王廟に参詣して、羊と豚を供え、一方にたくさんの食物をかまえて、鴉の友達に御馳走をした。

領薦は領郷薦であり、郷試に合格することを指す。古代中国の科挙には三段の試験があり、各省の生員をその首府に集めて行った第一段を郷試といい、郷試に合格すれば挙人の資格を獲得する。次に全国の挙人を北京に集めて第二段の試験、会試を行う。会試に合格した挙人はさ

17) 宮崎市定『宮崎市定全集15 科挙』(岩波書店、2000年)を参照。

18) 青柯亭刻本「竹青」では、「後領薦歸。復謁吳王廟。薦以少牢。已乃大設以饗烏友。」となる。別の版本を参考した上で、前後の文脈から判断すれば、公田連太郎のミスであると推測されるが、ここの分析に影響を与えないために、青柯亭刻本の引用を省略する。

らに引続き、天子自ら行う第三段の試験殿試に赴き、殿試に及第して、初めて進士の称号を賜わり、高等文官の資格を取得する。

ただし第一段の郷試に合格して挙人となった人は、第二段の会試に応じて落第しても、挙人の資格で官職に就くことが可能であり、これを挙人大挑と称する。この制度は会試に下第すれば引続き特別の試験を行い、成績優秀な人を選び、一等に列する者は知県に任じ、二等に列する者は教職に補用するようになる¹⁹⁾。

言い換えれば、郷試に合格した挙人は官吏になる資格を持っているが、必ず官吏になれるとは限らない。そこで、公田が「領薦」に付けている「推薦せられた仕官する也」という注釈は正確でないと言える。おそらく「薦」を推薦の意味として捉えているのではないかと考えられる。そして、「少牢」は中国古代、諸公が社稷をまつたときにそなえた羊と豚のいけにえ、また、そのごちそうである。一説に羊だけをいう²⁰⁾。公田は注で羊のこののみを提示している。

また、天馬と独歩がどのように訳しているのかも見ておきたい。

柴田天馬「竹青」

のやくにんにな 後ち領薦り 帰りに復た呉王廟に謁つて少牢^(三)を薦げた。

注(三) 少牢とは羊と豚を供えること。

国木田独歩「黒衣仙」

さて都に出て試験を受けると、今度は首尾よく及第した。大よるこびで故郷へ帰る途中、又た水神の廟に立寄り、今度はお礼の積りで水神へも供物を仕て、鳥には肉を十分に饗った。

天馬訳では、「領薦」と「少牢」という2つの語の漢字をそのまま用いられているが、「領薦」に付けられている振り仮名によって、天馬も「領薦」を「役人になった」という意味で捉えていることが分かる。ただし、「少牢」の注釈で羊と豚の両方を示している。このように、公田と天馬ともに「領薦」を官吏になったこととして扱っているが、「少牢」が指している肉の種類をめぐる解釈は違うことが見られる。

一方、「領薦」に関して独歩の訳は正しく、「及第した」と記述しているが、「少牢」を「供物」と簡潔にした。田中は独歩訳を参照していない可能性が高いと考えられる。つまり、田中が「領薦」を官吏になったと訳したのは天馬訳及び公田注の解釈を参照したが、正確な訳でないと言える。一方、「少牢」を羊と豚に訳しているのは天馬訳に沿ったと推測できる。

そして、末尾のところで長男漢産の紹介に「郡庠」という固有名詞が見られる。

19) 科挙に関する内容は宮崎市定『宮崎市定全集15 科挙』（岩波書店、2000年）を参照。

20) 『日本国語大辞典』第二版第七巻（小学館、2004年）を参照。

公田連太郎注付き「竹青」

漢産十二歳。入郡庠^(二六)。

注（二六）郡庠は郡の学校。

拙訳（本文）：

漢産は十二歳の際に、府学に入った。

柴田天馬「竹青」

漢産は十二の歳としに郡の庠がっこうにはいった。

田中貢太郎「竹青」

漢産は十二で郡の学校へ入った。

既に述べたように、「郡」は古代中国の行政区画であり、明清時代に府の雅称となった。「庠」は学校のことであり、「郡庠」は清代地方の学校である府学のことを指す²¹⁾。公田が注釈で「郡の学校」と解釈し、天馬が郡の学校として捉えているのは正確とは言えない²²⁾。田中は二人の訳をそのまま受け継いだと推測される。

先に挙げた固有の言葉以外、「竹青」には古代中国の伝説を典拠とした「漢臯解佩」の話がある。漢産が産まれた三日間後、漢水の神女たちが訪れる場面を見てみよう。

公田連太郎注付き「竹青」

生問皆誰何。女曰。此皆妾輩。其末後^(二一)著藕白者。所謂漢臯解佩^(二二)。即其人也。

注（二一）末後は最後なり。藕白は蓮の如き白き衣。

（二二）漢臯解佩。列仙傳に、「鄭交甫、漢臯台下に至り、二女の兩珠大さ荊鶏の卵の如くなるを佩ぶるのを見、交甫与に言う、願はくは子の佩を得んと。二女解きて之を与う。既に行きて反顧すれば、二女見えず、佩珠も亦失えり」となり。

拙訳（本文）：

魚は「皆は誰ですか」と聞いた。女は「皆は私の仲間です。最後の藕白の服を着ている人はいわゆる漢臯で佩を解いた人です。」と言った。

柴田天馬「竹青」

去いってしませってから生が、
「アレは皆みんな誰だエ」

21) 『漢語大詞典』第十卷、p630（世紀出版集団・漢語大詞典出版社、2003年）を参照。

22) 独歩訳では末尾のところで大幅に省略されており、「郡庠」に当たる内容がない。

と問ねると女が曰った、
「皆な妾の輩です、末後の藕白を着て居たのが所謂漢皐^(四)で佩を解いた仙女なんですよ」。

注(四) 列仙傳に鄭交圃という人が漢皐で二人の仙女が大きな兩つの珠を佩て居るのを見てそれを下さ
いといったら仙女は解いて鄭に与えた。鄭は少し歩んで振返って見たら仙女の姿は見えなかつ
た。そして珠も矢張りなくなってしまったということが出て居る。

田中貢太郎「竹青」

皆が帰った後で魚は竹青に問うた。

『あれは皆なんだね、』

竹青は云った。

『皆、私の朋輩ですよ、いちばん後ろにいた蓮の花のように白い着物を着たのは、漢皐台の
下で佩玉を解いて交甫に与えた方ですよ、』

「漢皐解佩」という中国の伝説について、公田と天馬ともに現存資料中最古の神仙伝記集『列
仙伝』における記述を参照し、注釈を付けている。公田は本文を引用しているが、天馬は『列
仙伝』の内容を口語訳している。それに対して、田中訳では注釈が一つも付けられておらず、
前記の呉王廟に関する紹介と異なり、ここでの典拠は作品の理解に大きな影響をあたえていな
いからであるだろう²³⁾。

このように、中国語における固有の言葉の翻訳及び典拠の訳し方について、田中は公田の注
釈及び天馬訳を参照したことが窺える。公田の注釈と天馬訳には、読解に支障が出るくらいの
誤訳ではないが、完全に正確と言えない訳が施されたところがあり、田中訳もその影響を受け
たことが見受けられる。

おわりに

本稿では、公田連太郎註付き原作及び参考対象となれる柴田天馬訳と比較しながら、田中貢
太郎が翻訳した『聊齋志異』「竹青」の特徴を分析した。

田中は作家であり、漢籍、特に『聊齋志異』をはじめの中国の怪談を好んでおり、そのうち
の35篇を翻訳、『支那文学大観第十二巻』として刊行された。この一冊は翻訳集であることが前
提なので、より正しい訳を求めていると想定できると考えられる。「竹青」を分析してみれば確
かにそうであり、田中は基本的に余計な描写をせず、原文の意味を可能な限り再現し、語順も
沿っており、拡大訳を控えていることが見受けられた。とはいえ、冒頭部における「秀才」と
いう語、また序の代わりに書いた「涼亭」からやはり田中の作家としての創作力が窺え、これ

23) 独歩訳では末尾のところでも大幅に省略されており、「漢皐解佩」に当たる内容がない。

が柴田天馬や増田渉など中国文学研究者の翻訳との違いであろう。

また、中国語における固有の言葉及び典故について、田中は公田の注解及び天馬訳を参考したが、公田の注釈と天馬訳には、完全に正確と言えない訳されたところがあり、田中訳もその影響を受けたことを明らかにした。

この『聊齋志異』「竹青」の訳として、独歩訳（1903年）、天馬訳（1919年）、田中訳（1926）以外に、増田渉「烏の黒衣―竹青」（『聊齋志異―中国千夜一夜物語』、新流社、1948年）、及び佐藤春夫「竹青の話」（『愛妖記』、『暮しの手帖』第13号、1951年1月）もある。残った2篇を分析し、「竹青」に対する翻訳の継承関係、またその変遷の傾向を明らかにすることを今後の課題にしたい。

